

### <随想> 『何日君再来物語』 について

立石, 伯 / TATEISHI, Haku

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

40

(開始ページ / Start Page)

76

(終了ページ / End Page)

78

(発行年 / Year)

1989-02-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019570>

## 随想

# 『何日君再来物語』について

私は今、巴金の『随想録』の一部、戴厚英の『ああ、人間よ』、鄭念の『上海の長い夜』をよんでいる。中国の文化大革命にかかわるフィクションやドキュメントである。読みながら深い感慨におちいらざるをえない。慨嘆するといった方が適切かもしれぬ。文革後の中国現代文学に暗いものの一つの感想にすぎない。

もはや旧聞に属することだが、「中国のリリー・マルレーン『何日君再来』の謎を追って」というテレビ番組が放映されたことがあった。中藪英助は十年近くかけて「何日君再来」の作曲家、作詞家の事実関係を追尋して『何日君再来物語』として上板したが、その取材の一端を収録したドキュメントであった。巴金や戴厚英などの書物を読むと、彼らと異なったモチーフながらほぼ似たような問題をあつかった中藪英助の書物が思いだされたのである。氏がなぜあの歌の不明な作曲家や作詞家を追いもとめたかを記す前に、中藪英助という作家をすこしく紹介する必要がある。

中藪英助の読者は、『拉致』『密書』『裸者たちの国境』などスパ

## 立石 伯

イヤドキュメンタリー・ミステリーの分野が多いかもしれぬ。もとよりそれらも独自の仕事にちがいない。けれども、戦時下の中国大陸を放浪した後、北京で同人誌「燕京文学」に加わって文学修行をつみ、敗戦による引揚げ後に「烙印」で文学的出発を印した足取りをみると、戦後文学・現代文学者としての明確な貌をのぞかせているだろう。中国とのかかわりを中心とした作品のみにかぎってみても、短篇集『彷徨のとき』にはじまり、自伝的要素を加味した『夜よ シンバルをうち鳴らせ』という長篇小説、蘇曼殊と辛亥革命をあつかった『櫻の橋』、大東亜文学賞を授賞して文革の嵐にまきこまれた袁犀をあつかった「夜雨、北に寄す」、戦時下の海上で抗日劇を上演した陸柏年をあつかった「北京の鬼」（両作とも『聖鬘伝説』収録）などをただちに脳裡にうかべることができる。フィクション、伝記などスタイルこそ異なっているが、これらはすべて氏の中国体験の思想化の努力の線上にうみだされた作品にはかならない。これらを氏の言葉を借用してまとめてみれば、次の『夜よ シンバ

ルをうち鳴らせ』新版あとがきの文章が適切であろう。「かつて占領者によって和平地区と命名された都が、被占領者によって淪陥区と呼ばれたことを想起する私は、つねに一つの世界、一人の人間さえが敵味方を混在させ、複合せせる二つの顔を持つことを余儀なくされた大戦下の深夜を振り返られるだけでなく、いまだ切り開かれざる等質な現代の闇の深さに直面させられていることに気づくのであって、小説のモチーフの一端もそこにかかる」のだと。断わるまでもなく、氏の諸作品は自己にはじまり、日本の現実、中国やアジア、世界のひろがりの中で、どうにかして「いまだ切り開かれざる等質な現代の闇の深さ」を抉りだす努力としてある。なまなかな脅力ではたちむかうことのできない文学的領域に触手をのびしつづけている作家の一人にはかなならぬ。こうした真摯な作家や作品の評判があまりきこえてこないのは残念至極である。

さて、「何日君再来」という歌は李香蘭、渡辺はま子、現在ではテレサ・テンなどに歌いつがれている歌だが、この歌の運命はじつに悲劇的である。時代の波をもろにかぶっている。まず、ここでは武田泰淳の連作『上海の螢』の「歌」にあらわれるこの歌についての記述を見ることにしたい。「『それから』何日君再来ハトリキミモウライという流行歌ね。いつ、あなたは戻ってくるの。その、あなたというのは、蔣介石ね。汪兆銘のことではないわよ」と、得意そうに彼女は告げる。それは彼女の思い過ぎだ、と私は思う。反抗するつもりなら、方法はいくらでもあるはずだ。第一、あの流行歌は、男を憶う女の気持を歌ったものにすぎない。「戦争末期上海在住の武田泰淳が作中人物の「私」とほぼ同様の見解であったとみてさしつかえ

ない。曖昧に「ほぼ」と記したのは、「私」が事件や事物の裏や深さを充分に見抜けぬ面をもつ男と設定されているためである。作中人物にEさんが登場するが、Eさんは石上玄一郎を髣髴とさせる人物である。その石上玄一郎は、中蘭英助の問いあわせに抗日歌だとこたえていた。ともあれ、ここに二つの代表的な見解が示されているのであって、謎は戦争期と中国革命の過程に於てさらに深まっていくのである。

中蘭英助はこの謎に直面してそれなりに解決した。氏は近刊『寄留者の歌』の「海浜日記」(一九八二年の項)に次のように記している。「三、四年前から調べてきて、不詳とされた作詞・作曲家も突き止め、歌にまつわるさまざま謎も解いたつもりだが、なおまだ疑問があり、なかなか着手できない。」いわば、あの歌は、氏の前にさまざま姿で出現した。証言そのものがあまりにも多岐すぎた。日本軍謀略工作の歌、頹廢的な亡国の歌、軟禁された蔣介石を恋うる宋美齡夫人の歌、一転して抗日の歌、文革後には黄色歌曲、さらには売春婦の歌。氏がこれらの謎めいた歌の姿態の裏側をのぞきこむよりどころは、戦時下の中国体験、とくに日軍占領下、中国の若者が重慶の抗戦地区、延安の解放地区へ旅立っていくのを見聞したところにある。それは同時に、戦時下の北京でつきあった作家袁犀や友人の陸柏年の運命を確かめることにも通じた。というのも、一九三〇年代以降からの日中関係の核心がこの歌一つにも集約されているという認識が謎を追求するにつれて深まっていったからである。それは文革という歴史の嵐の洗礼をうけることであって、たとえば、『櫻の橋』でかいた蘇曼殊の場合ならば、次のような事

態をさす。文庫版の後記に次の一節がみえる。「蘇曼殊の墓はたしかにありましたが、いまは移転してここにはありません……」／帰国後の室先生からこの話を聞いた私は、かねがね西湖畔にあった名妓蘇小の墓とともに、曼殊の墓も文革で壊されたという風説のあったことを知っていただけに、やんぬるかなという気がした。／では、曼殊の墓は日本へ帰ってきたのであろうか。そんな話も聴かない。とすると、せっかく永眠の地と定められた西湖の孤山を追われた蘇曼殊は、ふたたびみたび、日中間を往来する櫻の橋の中途にあって彷徨しているのではなからうか、という深い哀切の想いとらわれないではいられなかったのである。」つまり、／深い哀切の想いVが、「何日君再来」のなかにもかくされているからこそ、氏はその謎を追いつづけたといいかえることができる。何日君再来を初めに歌った黎莉莉のこと、そしてなによりも、この歌をひろめ、また三〇年代から四〇年代にかけての中国映画の名花・周璇について多くの記述があてられるのも、その時代、悲運、悲劇が彼女に於て象徴に高められているからにはかならない。

氏は多くの人々の助力によって作曲家、作詞家を遂につきとめることができた。とくに、「夜来香」などで知られる黎錦光の証言は明快で、作曲家・劉雪庵、作詞家・黄嘉謨ということが判明する。そして、劉雪庵こそ、反右派闘争、文化大革命の渦中で批判され、悲劇的な死を見舞われた芸術家の一人であったのだ。氏は八六年の暮に、渡辺はま子とテレサ・テンの合唱するあの歌を偶然にきいた感慨を次のごとく記す。「かつて愛国的作曲家のすさび手により別れの歌として世に送り出された名曲のタンゴ！ それは、国共ある

いは第三勢力の何れをも問わぬさまざまな思想信条を超えた音楽家、映画人、興行師の手を経て、民衆の秘めたる情念に火を放ちつつ、全民族の抗日の歌として滲透し、国境を超えて日本人をも巻きこむ愛唱歌となって、一世を風靡しただけではない。半世紀のいまにいたるまで、命を保ちつづけてきた」のだと。

氏はこの物語の結末をつけるために八七年上海と北京に渡る。四十数年ぶりに訪れた中国について記した「エピローグ」は感動的である。戦中に劉雪庵のそばにいて氏に有益な情報をもたらした黎錦光、今は詩人、作家となっている周璇の息子・周民との出会い、さらには、この歌の秘密を決定的に明白にすることになる雪庵の子息の一人・劉学蘇との出会いに端的に表現されている。事実や真実などがいかに解りにくいものであるか、曲りくねっていて容易に目的地に着くことができぬものであるか、ひしひしと実感されるのである。にもかかわらず、時に、発光する如く姿を現すものでもあることを語ってくれる。これをいささか固苦しい言葉で縮約すれば、ここには戦争下における抵抗と協力、芸術と革命、日中交流史上の諸問題、中国革命独自の問題、芸術家の宿命といった重々しいテーマが点綴されているということができる。

中国の数都市に遊び北京に到った昨年九月末、私は取材中の中藺英助とおちあった。氏は、言葉すくなく謎の解明にたちはだかるものを暗示された。その苦勞にもあれ一応の終止符がうたれて本当に喜ばしいかぎりである。だが、氏はこれをもまだ一つの過程と置いていられるであろう。中国、中国人、日本、日本人をとりまく闇がまだまだ深いからである。

(文学部教授)